

漢法苞徳塾資料	No. 149
区分	論説
タイトル	鍼灸治療と橋本先生の教え
著者	八木素萌
作成日	

◎“鍼は術だよ、心だよ、芸だよ”と言われた師の言葉

先生のお人柄（若干のエピソードから）

小康を得られて一時的退院をなさって後2度目の入院までの間、心配の余り体調をすっかり狂わせた奥様を、一生懸命に治療してあげた話、重態になられて傾眠状態に入り始められた頃、看病疲れのために先生のベッドに凭れて、ついうたた寝をしてしまったご子息の、背中を摩りながら、感謝と労りの言葉をつぶやかれていた由の話、先生に近い人にはよく知られているのですが、ご家族を非常に愛し本当に大切にしておられ、またたいへんお優しい話など・様々なエピソード、これらのことは先生の面目を如実に表わしております。

上に書きましたようなことや、亡くなる直前まで刺針の練習をされていた事などは、まさに、先生の治療家魂が並々なものではない事を物語っているのではないのでしょうか！また、大変に謙虚で・朴訥質素で・大変にシャイな方であった事もよく知られています。

『素岳会』が、先生が他界されて100日目に行なった「素岳先生を偲ぶ」会合の時に、会のメンバーは口々に

『優しく大変暖かい父親^{おやじ}だった』

『優しくて随分と体調の事やその他の事を心配して下さった』

『暖かく包んで下さるような先生で、先生の前に出ると自分でも不思議に思うほど素直になるものでした』

『先生は質朴でお好きなものを伺ってもニコニコされるばかりでしたが、アンパンを喜んでおられたね』

『贅沢なものを食べていると内臓疲労になるから…と言われていたね』

『先生は優しいんだけど、何か奥のほうにリンとしたものがあつたよね』

『“いのち”を診ると言う事を、具体的で日常的な例でよく教えて下さったね』

『先生は我々が少し出来ると“良く出来たね”と励まして下さった』

『卒業して数年経った頃“握手しよう”と手を出されて“治療家としての手が大分出来たね”と言って下さったときは本当に嬉しかった。それに、先生の手は暖かく柔らかで本当に気持ちがいい手だったよ』

『その人に向いた言葉でいろんな事を教えて下さったね』

『先生は学校の事・柳谷精神をひどく重んじておられたね』

等々と、こもごも話し合いました。

この時の話は、学生のと時からほぼ20年も師事し続けて来た『素岳会』会員の、先生を慕う心底からの気持ちがにじみ出ていました。

先生の技

橋本先生は、柳谷素霊師の完熟期の内弟子として5年余りを勉められて、柳谷先生から手伝えの技術教育を受けられた、それを、さらに御自分の50年にも渡るキャリアが加わって仕上げた技術は正に「入神の技」である。『素岳会』メンバーは、たいてい先生に治療して頂いたり、「こう言う風にやるんだよ」と身体で先生の術を味わいながら、『打鍼術』『スジ揉み』『振り子鍼』『毫鍼』『長鍼』『貝鍼』『鋒鍼』『三稜鍼』『大鍼』などの刺し方について技術の教えを受け、また、詳細な説明が『貝利鍼』『鋌鍼』『鑱鍼』に行なわれました。

先生の術を受けた誰もが「気持ちが良い、少しも痛くない」ことを経験し、また、「スジ揉み」では「本当にソフトで気持ちが良いのに、ここぞと言う処に来ると“効く・徹る”ので“治るなあ、きつと”と感じる」のでした。

先生の技が入神のものであることは、いとも無造作に見える「線香刺し」や、今日の極めて数少ない「打鍼」を「日常の臨床に運用する」治療家であって「少しも痛みを与えず、気持ちのよい響きを出す」こと等からも、誰にも了解される事でしょう。

先生の教え方

先生の教え方は「一寸手を貸しなさい」と、文字通りの「手伝え」・「手を取って」のものでした、ツボの手触り・鍼がツボに当たっている感じ・“気が来ている”感じ・ツボは前揉撫のやり方で現われたり隠れたりすること・それは揉撫の場合の手指の使い方にある事・など等と大切な事を何度も教えられた。

「“何としても患者さんが楽になるように!”と祈るような、治療家の真摯で一心不乱な姿が、患者の心に響いて、その回復力・抗病力・抵抗力を励ますのだよ」

「こういう心がないと、技術が上手なようでも効果が意外にも落ちるものだよ」

「30年40年以上の経験を重ね、名手とも言われている先生の、診察から治療の終了までの時間が、20分だからと言って、経験も勉強の程度も遥かに及ばない者が真似られるわけではない。なぜなら、新人が一時間かかって診察しても、その先生と同じ水準の診察が出来ますか？また技術の水準も遥かなものでしょう！だったら、“外見”を真似ようとするよりも、正しい診察・診断、正確な取穴・配穴、よい治療・正確な手技運用、に全霊を傾けなさい。そういう経験を重ねる事によってこそ、〈名手の先生〉のような治療家になれるんだよ」

と諭されたものです。そして

「私等の鍼灸治療は、術だよ・芸だよ・心だよ、倦まずたゆまず務めないとね」

と度々教え諭されました。

「5穴を探って1穴を取るんだよ、真穴を取ればツボ数は絞られて無駄が無くなるよ」

「鍼治療は身体に異物を入れるのだよ、だから無理に強引に刺し込んではいけないよ」

「ちゃんと挨拶をしてから鍼を入れなさいよ、前揉撫が挨拶だよ」

「優しく5度弾入を試みて刺さない所は、生体が拒んでいるツボだから、刺してはならないんだよ」

「深い病はね、浅い所から順に剥がして行くんだよ」

「前揉撫のやり方でツボは現われたり隠れたりするものだよ、だからこうしなさいよ」

等の言葉や、

「いい治療は気持ちの良いものだよ・漢法医学の治療とはそう言ったものだよ」

などを教えて下さった。

いとも無造作に見える橋本先生の“線香刺し”は、まさに「入神の術」であった。そのほか、「スジモミ」「夢分流打診」をして頂いた時の「味」ほか、9鍼を伝授頂いた時の師の手振りや言葉、これらのことは、私たちににとっては「肌の記憶」「身体が覚えているもの」「目に耳に焼き付いたもの」として、深く刻印されております。ひどく地味で自ら誇るところが全く見えなかったのですが、先生の技は、何度も言うようですが本当に「入神の技」でした。そして、良く言っておられた事は「先輩から受け継がれた技は、たとえ一人にでも、キチンと伝えて行くようにね、それは先輩へのご恩返しだよ、道を継いだものの務めだよ」と言う事でした。

また、そのような橋本師は「鍼の補は本当に難しいものだね、どうしても瀉になる事が多いもの」ようだね、柳谷先生は重要な所では抜鍼のあと灸される事が多かったよ、注意深く鍼を打たねばな」と言われた事がありました。鍼治療家への大きな戒めとなっているのではないのでしょうか！！

むすび

このような事のほか、先生から頂いたものはもっと一杯ございます。何かを思い出して書くと次から次ぎへと、教えて頂いた事が想い起こされます。それは、単に技術的な事に停まりません。人間としての事・暮らし方や生き方についての事などが、暗黙のうちにジンワリと滲み込むような、「無言の教え」に満ちています。実に多くを頂きました。

先生の葬儀の時の「在校生代表」と「同窓会代表」の二つの「弔辞」は、極めて見事に先生の面目を描き出していました。それに較べると、この小文は「思いばかりが勝っている」粗末なものになりました。先生が受け持っておられた授業を担当させて頂く事になった時、大きな名誉と思うとともに、これは大変な事になってしまったと言う「懼れ」にとらわれました。そして、「やさしく・分かり易くね！」の教えを、なんと難しいことかと反省する日々です。

終